

社員を幸せにできるのが俺の後継者!

インタビュー vol.7 ～「巻尺」を作って94年～ 日本度器(株) 藤田眞弘社長を訪問

■ まもなく創業百年

度器とはいわゆる「ものさし」のことで、同社では主に「巻尺」を製造しています。創業は大正10年(1921年)。あと6年で百年企業となる老舗です。

泉南市にある「りんくう工場」を見学しました。真新しくキレイでゆったり。カラフルな色調にも藤田社長のこだわりが伺えました。工場に入ると、巻尺の「帯」を作る特製の機械が忙しく稼働しています。ガラス繊維や鋼などでつくられた帯に、目にもとまらぬ速さで目盛が印刷されてゆきます。

こうした巻尺を作る会社もいまは少なくなり、全国で6～7社にまで減少しました(同社は売上規模で5番目)。他の工業製品と同様に、安価な巻尺は中国製の台頭で押されました。例えば日本製なら二千円くらいのものが、中国製なら数百円で手に入るようになりました。廉価品を作っていた会社はすでに1980～90年代に淘汰されました。

しかし家庭向けの安物はプロの現場では通用しません。材質、精度、耐久性、使い勝手などがまったく違うからです。同社で製造するのはいずれもプロ仕様の高級品ばかり。長さ50～100メートルの長いもの。パイプに巻きつければ直径が測れる特殊なメジャーなど。面白いのが、原油タンカーなどでオイルの深度を読み取るメジャー。原油タンクの底には砂が沈殿しているため、正味のオイル量を測る必要があるのです。それは先端にオモリが付いていて、タンクに沈めて深さを測るというもの。ニッチ市場ですが確実にシェアを取っています。安い海外製に対抗するべく知恵を絞り、そして技術を磨いてきた歴史がまざまざと感じられます。

■ 同友会でのコラボも

藤田眞弘社長(61歳)は3代目で、先代社長だった父親から34歳の時に事業承継しました。すでに中学生の時に「親父の葬式を出すのは俺や」と、後継ぎを決心していました。学卒後に取引先の商社に勤め、27歳で同社に入社。すぐに同友会にも入会したので、会歴30年を超える古参会員です。

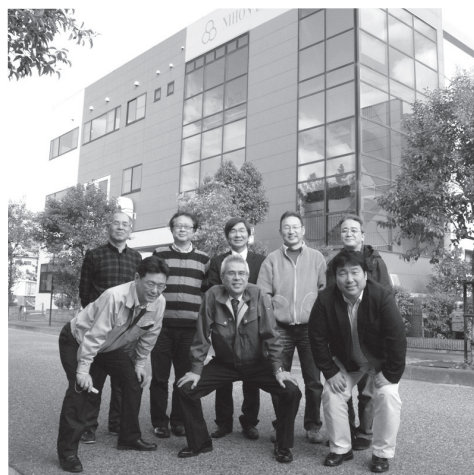
同友会で知り合ったタカラ産業の樋爪伸二氏(当研究会顧問)とコラボした製品も作っています。それは20年ほど前のこと。大口の取引先から提示された価格が余りにも安く、製造に困難を感じていました。そんなとき中



▲ 藤田社長



▲ 釣果を囲んでの鍋会



◀ カラフルな社屋

国(蘇州)でプラスチック成型工場を経営していた樋爪氏に相談しました。巻尺の中身は高品質な日本度器で、外側のケース、そして組み立ては蘇州のタカラ産業で。そうすることにより日本製の品質と低価格を両立させることに成功しました。樋爪顧問は長い付き合いである藤田社長のことを「すべてに熱いひと」と評します。

■ これぞ日中の輪!

さて、この日の取材は日中経済交流研究会のメンバー7人が押し掛けてのもの。会社見学のあとは同社の社員食堂にて鍋会。鍋のネタは会社訪問の前に釣行していた当研究会の樋爪顧問と落合会長の「釣果」次第というスリル満点のもの。果たして、トラフグ2匹の入ったてっちり。そしてサーモン、ヒラメの刺身という豪華版でした。

飲むと話も深まります。藤田社長は6年後の創業百年を機に、社員に社長を譲るお考えです。社員のなかから育った方に後を託されます。「社員を幸せに出来るのが俺の後継者」と明言します。藤田社長に後継ぎの条件を聞きました。答えは明快でした。

「最後は人間性」

素晴らしい仲間の輪に酔いしれた、学び深い一日でした。

まとめ：坂元鋼材(株) 坂元 正三